
ドラゴンボール～クリリンと18号のラブストーリー～

生時(レジェンド)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンボール〜クリリンと18号のラブストーリー〜

【Nコード】

N6882E

【作者名】

レジエント
生時

【あらすじ】

今も大人気の鳥山明先生の「ドラゴンボール」今回の作品は、この「ドラゴンボール」に登場するクリリンと18号の恋愛を描いた二次創作です。

第1章 クリリンの恋（前書き）

こんにちは^^レジェンドの生時です。

ドラゴンボールで好きなキャラはトランクスと18号です。

今回は18号とクリリンのラブストーリーを書いてみました。

第1章 クリリンの恋

セルを倒し地球を救ったZ戦士たち・・・
彼らはセルに殺された人達を生き返らせるため、神の神殿に向かった。

クリリンは気絶している18号を連れて行くことにした。

神殿に着くと、新しく神となったデンデが、不思議な能力で皆の傷を回復させた。

18号がふと目を覚ます。

敵である18号をかばうクリリン・・・彼は18号に恋をしてしまったのだ。

戦士たちは、ドラゴンボールに二つ目の願いを叶えてもらった。

一つめの願いはセルに殺されたもの達を生き返らせることだったが、だがセルとの戦いで死んだ孫悟空は、一度よみがえった事があるため、生き返れなかった。

戦士たちはナメック星のドラゴンボールで生き返らせようとしたが、悟空自身があの世から拒否をした。

二つ目の願いは、17号と18号を元の人間にしてほしいとクリリンが頼んだ。

しかし、二人のパワーが大きすぎるため、叶わなかった。

クリリンは別の願いを言った。

それは、17号と18号の中にある爆弾を取り除く事だった。
密かに願いを聞いていた18号・・・突っ張っているが心の中では感謝していた。

その後、18号はクリリンたちの前から去っていった・・・
だがクリリンは嬉しかった。孫悟空が戦死し、悲しみもあるが、18号が去るときに、

「またな」

と言ってくれたからだ。

まともに会う約束はしていないが、クリリンに希望が見えてきた。

そして時が流れた・・・

ある日、天津飯と餃子、そしてセル戦で戦死した孫悟空以外のZ戦士たちやブルマ、ウーロン、プーアル、亀仙人、チチ、牛魔王などの仲間がカプセルコーポレーションに集まってパーティをしていた。この日、未来に帰ったトランクスが、人造人間を倒したという報告をしに、現代にやって来たのだ。

成長した息子にまた会えて、ブルマは大喜びだ。

「トランクス、人造人間を倒せたのね」

「はい、17号と18号・・・そして、セルを倒す事ができました」

「これでアンタの時代も平和になったわね」

「すべて、ここにいる皆さんや悟空さんのおかげです」

それを聞いていたベジータは、そっと微笑んだ。

嬉しい報告なのだが、クリリンだけは複雑な気分だった。

トランクスの時代の17号と、18号は殺戮を繰り返す悪魔だ。

だからトランクスは二人の人造人間とセルを倒した。

だが、別の時代では悪魔のような存在でも、18号に変わりはない。

クリリンは心の底では悲しんでいた。

そんな悲しんでいるクリリンのそこへ、ヤムチャが話しかけに来た。

「クリリン、元気ないなあ」

「ヤムチャさん」

「まあ、恋愛経験の豊富な俺には、クリリンの気持ちがよく分かるぜ」

それを聞いていたピッコロは、

「恋愛・・・やはり俺には分かんことだ」

と、呟いた。

男女関係のないナメック星人には、永遠に分からない事だろう・・・

「クリリン、お前が惚れたのはこの時代の18号だ。」

「そうですが・・・やっぱ悲しいですよ」

「クリリンは優しいからなあ」

二人で話していると、悟飯も話に入ってきた。

「クリリンさん、あれから１８号さんとお付き合いをしているのですか？」

「そうだ、どこまでいったか教えろよ」

「１８号とは、あの時以来会っていない」

「どうしてですか？」

「アイツの居場所、知らないんだよ」

Ｚ戦士たちは気を感じる事が出来る。

だが、１８号は人造人間のため、気を感じる事が出来ない。

「クリリン、いつか会えるさ」

「そうですよ」

「あ、ああ・・・」

突然、チチと話をしていたブルマが、大声で、

「皆、ビックニュースよ」

「母さん、どうしました？」

「チチさんおめでたなのよ」

さすがに全員驚いた。

「ホントか悟飯」

「はい、もうじき僕もお兄ちゃんになります」

「完全に、俺の時代とは違う、別の時代になってしまいました」

トランクス这个时代では、孫悟空が心臓病で死んだため、次男である孫悟天は誕生していない。

「うちのチビトランクスの一つ下か・・・男の子かな？」

「オラどっちでもいいだ。悟空さとオラの二人目の子供だ」

「（結婚か・・・１８号と結婚できたらなあ・・・）」

そしてパーティは終わった。

トランクスは、明日の朝に未来に帰るようだ。

次の日・・・

トランクスはタイムマシンに乗り、未来に帰っていった・・・

第2章 再会

クリリンはトランクスを見送った後、18号に会いたくて、北に向かった。

北に向かったのは、かつて、北のある場所にドクター・ゲロの研究所があったからだ。

だが、ドクター・ゲロを嫌っていた18号が、そんなところにいるはずもない・・

クリリンは北の都で休む事にした。

公園のベンチで座って休んでいたら、ガラの悪い3人組が話しかけてきた。

「にーちゃん、ちょっと金かしてくれよ」

だがクリリンには眼中になかった。

「シカトすんじゃねー」

3人はポケットからナイフを出した。

だが相手が悪すぎる。

クリリンがベンチを立った瞬間、3人は倒れた。

目にもとまらぬ速さで、3人に一撃ずつパンチを放っていた。

「うつゝ・・お、お前・・俺達のバックには・・と、とんでもなく強い人がいるんだぞ・・」

「あつ、そう」

「おい、ザーコたちがやられてるぜ」

さらにコイツラの仲間が二人現れた。

「ザーコ、大丈夫か？」

「あ、あの人に連絡を・・」

「分かった。おい、ハゲ頭逃げんなよ」

クリリンはいらだっていた。

「少し暴れれば、気分も晴れるかな・・でも、こいつ等弱いし・・」

そう言つて、クリリンはベンチに座つた。

疲れていたのか、クリリンはそのまま眠り始めた。

「お、おい・・・アイツ寝てるぜ・・・誰か立てるやつはいないか？」

「オ、俺は無理・・・」

「だけど・・・俺達なんで倒れたんだろう」

「さあな・・・だが、あの方が来れば・・・」

しばらくすると二人の仲間が、一人の女性を連れてきた。

「アイツか？」

「はい」

「野郎、寝てますぜ」

「あいつを倒したら、10万ゼニーだからな」

「はい」

女はクリリンに向かってエネルギー波を放つた。
ドーン！

「いてー・・・何だ？何が起きたんだ？」

クリリンが目を覚ました瞬間・・・

女が再びエネルギー波を放つた。

「やりやがったなー」

クリリンもお返しに気功波を放つた。
ドーン！

「しまった。強く打ちすぎた」

気功波で辺りが煙幕に包まれた。

煙幕が消えると、クリリンは相手の正体に気づいた。

「じゅ・・・18号・・・」

奴らが連れてきた女は、18号だった。

だが18号の攻撃は続いた。

「待ってくれ」

「問答無用！」

「俺はお前に・・・」

「アンタを倒さないと、10万ゼニーをもらえないんだよ」

「な、何でお前があいつらの・・・」

「本気を出しな。それとも降参する？」

「お、おい、あの二人知り合いか？」

「俺が知るか」

クリリンは18号の攻撃をかわし続けた。

「18号、教えてくれ、なんであんなやつ等の仲間になったんだ？」

「・・・私に勝てたら教えてやるよ」

「・・・よし、人のいないところで戦ってやる」

二人は誰もいないところへ飛んでいった。

「お、おい、飛んでいったぞ」

「ゆ、夢かな・・・」

二人は誰もいない荒れ果てた地で、戦い始めた。

ものすごい攻防戦が続く・・・

「さすがに強い・・・そういえば、ベジータたちが、18号たちと戦っているときに、俺は怖くて動けなかったなあ」

だが今回は負けられない。

なぜ18号が、あいつらの仲間なのか知りたいからだ。

だがクリリンは負けた。

18号のエネルギー弾を受け、気を失ったのだ。

第2章 再会（後書き）

ドラゴンボールには格闘シーンが必要だと思い、18号とクリリンを戦わせました。

第3章 18号と病気の女の子（前書き）

朝の4時からドラゴンボールの事を考えていたら、
完全に病気の事を忘れて、いつの間にか昼過ぎになっていました^
^

第3章 18号と病気の女の子

「う、うう・・・」

クリリンが目を覚ました。

「18号！・・・せつかく会えたのに・・・」

だが、クリリンの後ろから18号の声が聞こえた。

「りんごを取ってきた。食べな」

「お、お前わざわざ俺のために・・・」

クリリンは嬉しかった。

「俺、負けたんだよな・・・」

クリリンは本気で戦って負けた。

「俺、お前に会いたくて、探したんだぜ」

「（コイツ、私に会いに来てくれたんだ）」

「でも、もう会うことはないな・・・やっぱ、俺みたいな男じゃ無理だよな」

「・・・」

「でも、会えて嬉しかったぜ・・・じゃあ、元気だな」

「待ちな！」

「な、何だよ」

「どうせ暇だろう。ちょっと付き合いな」

「い、いいけど」

二人は北の都に戻った。

「どこに行くんだ？」

「もうすぐ着くよ」

18号は病院の前で立ち止まった。

「知り合いでも入院しているのか？」

「ちよつとね」

病院の中に入り、18号は個室の前で止まりノックした。

コンコン！

「どうぞ」

ドアを開けると、5歳くらいの女の子が入院していた。

「おネーちゃんが出来てくれた。」

18号が見舞いに来てくれたので、女の子は喜んでいた。

名前はリンリン・・・

「いつもすいません」

母親があいさつをしてきた。

「おネーちゃん、その人彼氏？」

クリリンは一瞬ドキツとした。

「コイツはただの友だちだよ」

クリリンの心の中では「彼氏」と言いたかった。

「おネーちゃん達、ケガしているけど大丈夫？」

「これくらいなんともないよ」

「どうぞ座ってください」

母親がたたんであった椅子を用意した。

「あつ、どうも」

そう言つてクリリンは座った。

「（この子と、18号はどういう関係なんだろう・・・それにあいつ等との関係も気になる）」

18号は、リンリンのベッドに座った。

「今日、約束のぬいぐるみを持つてこれなかった」

「いいよ。いつもいろいろと持つてきてもらっているし、おネーち

やんが出来てくれただけで、嬉しいから」

「そうか」

クリリンは、二人の会話を静に聞いていた。

第3章 18号と病気の女の子（後書き）

調子が良かったら続きを書きます^^

第4章 ドラゴンボール

しばらくして、18号とクリリンは院内の喫茶店にいた。

だが、二人の席だけ会話がなかった。

クリリンは何を話そうかと考えていた。

「お、俺も昔入院した事あるんだ・・ベジータたちにやられて・・」
「・・・」

18号は窓の外を眺めていた。

「武天老師様に聞いたんだけど、悟空のヤツ、注射が怖くて騒いでいたらしいぜ・・おかしいよな。あんなに強いのにさ・・」

「あの子、小さい時から病氣と闘っているんだってさ」
今まで黙っていた18号が話し始めた。

「数ヶ月前、私の前で倒れていたから、この病院に連れてきた」

「そうだったのか・・」

「何か、妹が出来たみたいでさ・・それで、見舞いに来るようになった」
「た」

「じゃあ、あのチンピラたちは？」

「小遣い稼ぎで用心棒をしてやったのさ・・あいつ等、私にへんなことしてきたから、痛めつけてやった。そしたら、用心棒になってくれて言うんだよ」

「・・・ハハ、そうなんだ・・」

クリリンは少し引きつっていた。

「安心しな、殺した事はないから」

クリリンは少し安心した。

そして、18号の優しさをあらためて知った。

病気の女の子たちにお見舞いに来ていたのだから・・

「なあ、あの子、ドラゴンボールで治してもらおうぜ」

「な、治せるのか？」

「ほとんどの願いなら叶うんだ・・お前の爆弾も取り除いてもらっ

「ただらう」

「ああ・・・」

「だけど、ドラゴンボールは7つ集めないといけないがなあ」

「よし、今すぐ集めに行くぞ」

「その前に、ブルマさんのところに行つて、ドラゴンレーダーを借りてこよう・・・それがあれば、すぐに見つかるさ」

「・・・ありがとなあ・・・この前の時も嬉しかったぜ」

「て、照れるじゃないか」

二人は、ドラゴンレーダーを取りに、西の都に向かった。

第5章 18号対ベジータ（前書き）

ドラゴンボールなので、再び格闘シーンを書きました。

第5章 18号対ベジータ

西の都・・・

「ここがブルマさんの家だ」

「ふ〜ん」

クリリンは呼び鈴を押した。

「クリリンですが、ブルマさんいますか？」

「ブルマお嬢様ですか・・・少々お待ちを・・・」

しばらくして・・・

「クリリン!？」

「あっ、はい・・・」

「どうぞ」

二人は中に入っていた。

客間・・・

「どうしたのよ？クリリン」

「実は・・・」

「あら、そちらの方は？」

この時代のブルマは、18号と合うのは初めてだ。

「こいつ、あのドクター・ゲロの作った人造人間18号ですよ」

「ああ、アンタの好きな・・・」

クリリンの顔が赤くなった。

「そ、そんな事はいいんですよ」

そう言いながら、18号のほづをチラッと見た。

そしてクリリンは、ブルマに事情を説明した。

「そういう事なら、もっていつていいわよ」

クリリンは、ブルマからドラゴンレーダーを借りる事ができた。

「それじゃ俺達、急ぎますから」

そのとき、ベジータが入ってきた。

「ブルマ、重力装置が・・・ん？貴様は人造人間・・・何故ここにいる」

「・・・悪いかよ」

ベジータは、今にでも切れそうだった。

「ベジータ、二人のジャマをしちゃダメよ」

「フン・・・まあいい・・・こんなヤツ、今の俺の敵じゃあないしなあ・

・」

「よく言うよ・・・あの時、私に勝てなかったくせに・・・」
ベジータは完全に切れた。

「何！上等だ！外に出ろ！相手をしてやる」

二人は庭に出て、戦い始めた。

ものすごい攻防戦だ。

「どうした人造人間・・・あの時と立場が逆転したなあ」

「これから本番だよ」

ブルマとクリリンは二人を止めに入った。

「ちよつと、家が壊れるじゃない」

「ジャマをするな・・・ブルマ」

「クリリン、アンタ止めなさいよ」

「お、俺が！？」

18号は、エネルギー弾を放とうとした。

「やめろ18号！あの子の病を治す事のほつが大事だろう」

「・・・」

クリリンの言葉で、18号は攻撃をやめた。

「どうした？人造人間・・・攻撃するんじゃないのか？」

「アンタとの遊びはここまでよ」

「逃げる気か？」

「ベジータ！いい加減にしろなさい！」

「チツ・・さつさと消えやがれ！」

「そ、それじゃ、ブルマさん・・行こうぜ18号」

二人はドラゴンボールを探しに出かけた。

最終章 告白

ドラゴンボールを探す旅に出たクリリンと18号。

「（18号と二人で旅に出られるなんて、夢のようだ）」
クリリンは、18号と旅が出来て、嬉しかった。

そして、一つ目のドラゴンボールを手に入れた。
今のクリリンと18号なら、ドラゴンボール探しは難しくもない。
その後、ドラゴンボールを3つ手に入れた。

「18号、今日はこれくらいにしようぜ」

「ああ・・・」

クリリンは、持っていたホイホイカプセルを投げた。
すると、小さな家が出てきた。

二人は中に入ってしまった。

「狭い部屋だな」

「これしかなかったんだよ」

「ふーん、まあいいわ・・・おい、オッサン」

「な、何だよ」

「変なことしたら、殺すからな」

「わ、分かっているよ」

だが、クリリンの頭の中は18号でいっぱいだ。

「（俺も男だ。今こそ告白しよう）」

クリリンは18号のほうを見つめた。

「じゅ、18号・・・」

「何だよ」

「お、俺、お前の事が・・・」

だが、クリリンは、ふられるのを恐れた。

「な、何でもない・・・お休み」

「・・・」

18号は、クリリンの気持ちを知っている。この時、クリリンが何を言おうとしたのか、分かっていた。

しばらくして・・・

クリリンはソファで寝ていた。

18号は、

「・・・お休み」

と、言つて、クリリンの頬に優しくキスをした。

次の日・・・

二人は再びドラゴンボール探しに出かけた。

そして、残りのドラゴンボールを全部集め、シェンロン神龍を呼び出した。

「どんな願いも、二つ叶えてやるう」

「リンリンという子の病気を治してほしい」

と、クリリンが神龍に頼んだ。

神龍は願いを叶えた。

「一つ目の願いは叶えてやった。もう一つの願いは何だ？」

「あの子の病気は治ったみたいだ」

「そ、そうか・・・あと一つ願いが叶うんだな」

「ああ・・・」

「・・・リンリンの記憶から、私と過ごした記憶を消してほしい」

「じゅ、18号！いいのかよ」

「もうあの子に、私は必要ない」

「（１８号の奴、そこまで・・・）」

神龍は、二つ目の願いも叶えた。

これで、リンリンの記憶から、１８号は消えた。

「願いを叶えてやった。さらばだ」

ドラゴンボールは石になり、世界に散らばった。

「オッサン、いろいろとありがとなあ」

「お、おう・・・」

「じゃ～ね」

１８号が飛び立とうとした時、

「まっ、待ってくれ！」

クリリンが１８号を引き止めた。

「お、俺は・・・あの・・・その・・・」

ここで、１８号と別れたら、二度と会えない・・・クリリンはそう思った。

「俺は、お前の事が・・・その・・・好きなんだよ！」

ついにクリリンは１８号に告白した。

「やつとお前に言えた・・・でも分かってる。お前は俺なんかにはもつたいない女だ・・・告白出来ただけ、悔いはないよ」

クリリンは１８号の事を諦めようとしていた。

「い、いつか、俺みたいな男を、好きになってくれる女性が現れるのを待つよ」

「・・・ば～か、お前みたいなオッサンに、付き合ってくれる女なんかいるかよ」

「そ、そうだな・・・俺みたいな男、誰も付き合ってくれないよな」

「ああ・・・だから私が、アンタと付き合ってやるよ」

「えっ!？」

「アンタと付き合ってやると言ったの」

「じゅ、１８号・・・いいのか？」

「ああ、ヨロシクな・・・ク・・・クリリン」

そう言つて、18号はクリリンの唇に、優しくキスをした。

その後、二人は結婚し、マーロンという娘も授かり、幸せな日々を過ごした。

最終章 告白（後書き）

これで二人のラブストーリーはおしまいです^^

番外編 トランクス ラブストーリー（前編）（前書き）

トランクスが好きなため、番外編を書きました^^

番外編 トランクス ラブストーリー（前編）

人造人間17号と18号、そしてセルを倒したと、過去へ報告に行ったトランクスが帰ってきた。

「ただいま」

「お帰りトランクス」

トランクスは、別の時代では孫悟空に二人目の子供が出来たことを、母ブルマに話した。

「そう、孫くんに二人目の子供が出来たんだ」

「はい」

しばらく話に夢中になる二人・・・

「あら、もうこんな時間・・・買い物に行かなくちゃ」

「俺が行きますよ」

「そう、じゃあ、お願いね」

「はい！」

トランクスは買い物に出かけた。

人造人間たちに破壊された街も再建が進んでいるようだ。

トランクスは買い物を済ませ、帰宅する途中・・・

「きゃー！」

と女性の叫び声が聞こえた。

「何だ？」

トランクスは女性の声が聞こえた場所に向かった。すると3人の男達に襲われている女性が一人いた。

「誰か助けてー！」

「へへっ、騒ぐなよ」

「やめろ！」

「あゝ？何だ。テメエは？」
人造人間を倒しても、愚かな人間がいる限り、真の平和は来ないよ
うだ。

「このガキ、やっちまえ！」

だが、3人は相手が悪かった。

人造人間たちを倒したトランクスに勝てるわけがない。

トランクスは、3人を一瞬で気絶させた。

「大丈夫か？」

「は、はい」

「それじゃ」

「あ、あの・・・」

「なんだい？」

「お名前を教えてください」

「俺は、トランクス。君は？」

「私はリンリン」

「こんな時代だ。また襲われるかもしれないから、家まで送るよ」

「・・・家なんてないわ・・・人造人間のせいで、母は殺され、帰る場
所なんてないの」

別の時代の18号は、このリンリンを妹のように思い、病院に見舞
いに来る優しさを持っていた。

時代が違うだけで、こうも変わってしまうとは・・・

この時代のクリリンたちを殺したのも人造人間だ。

別の時代では、クリリンと18号は結婚しているのに、この時代の
18号は悪魔だ。

「俺の家に来る？」

「いいんですか？」

「ああ」

カプセルコーポレーション・・・

「ただいま」

「お帰り。その子は？」

「実は・・・」

トランクスは母ブルマに説明した。

「そう言うことなら、いつまでも居ていいわよ」

「ホントですか？」

「ええ、それに、トランクスが女の子を連れてくるなんて、今までになかったから嬉しいの・・・この子テレやだから」

「母さん」

「リンリンちゃんは、いくつ？」

「二十二歳です」

「トランクスより上か・・・でも、かわいいから、良かったじゃない。お似合いのカップルよ」

「か、母さん、何を言っているんですか」

「ハハッ、照れちゃって」

ブルマは、戦いに生きる息子に、恋人が出来るか心配なのだ。

「お、俺、修行してきます」

そう言つてトランクスは出て行つた。

しばらくして、ブルマが夕食の用意をし始めた。

「あ、あの、私も何か手伝います」

「そう、じゃあお願いね」

「はい」

「リンリンちゃん、お父さんは？」

「父は、私が生まれてすぐに、事故で亡くなりました」

「そう・・・ゴメンね・・・へんなこと聞いて・・・」

「あ、あの、トランクスさんのお父様も、もしかして・・・」

「夫も人造人間に殺されたわ」

「そうですか・・・」

夕食の用意を終えて・・・

「トランクスさん遅いですね」

「先に食べましょう」

「いいんですか？」

「いいのよ。いつ帰ってくるか分からないし」

「そ、それでは、いただきます」

その頃トランクスは、厳しい修行をしていた。

トランクスは、人造人間を倒しても、また邪悪な強敵が現れてもいように、常に強さを求め続けた。

番外編 トランクス ラブストーリー（後編）

カプセルコーポレーション・・・

ブルマたちは食事を終え、コーヒーを飲みながら話に夢中になっていた。

「私、母が殺されてからは、一人でしたから、こんなに誰かとお話するの、久しぶりです」

「リンリンちゃんは彼氏いないの？」

「はい・・・トランクスさんは、彼女いるんでしょうか？」

「アイツもいないのよ。私の息子なのに、孤独なところは夫にそっくりなのよ」

リンリンは少しずつ、トランクスに好意を抱いていた。

「トランクスさん、すごく強いですね」

「・・・リンリンちゃん、実は・・・」

ブルマは、リンリンに、人造人間を倒したのはトランクスだと説明した。

「そうだったのですか」

リンリンの中で、トランクスは遠い存在となった。

しばらくして、トランクスが帰ってきた。

「ただいま」

「お帰り、今日の夕食、リンリンちゃんが手伝ってくれたのよ」

「へー、いただきます」

リンリンは、トランクスの方を見つめた。

強くて、優しいトランクス・・・

しかし、リンリンとは別の世界を生きてきた戦士・・・

「ご馳走さま・明日も俺、街の再建の手伝いがあるから」
そう言つて、彼は部屋に行き眠りについた。

それから二週間後・・・

「いつてきます」

トランクスは、朝から街の再建の手伝いに出かけた。

時が経つほど、リンリンのトランクスへの思いは強くなつてきたが、まだ、トランクスは、遠い存在であつた。

「（この気持ちを伝えたい・・・でも私にはそんな勇気がない）」

「リンリンちゃん、どうやら本気でトランクスの事を好きになつたみたいね」

「・・・はい、でも告白する勇気がなくて」

「リンリンちゃん、勇気を出して」

「は、はい」

夕方・・・

トランクスが、手伝いから帰つてきた。

「ただいま」

「トランクスさん、お帰りなさい」

「あれ！？母さんは？」

「ブルマさんは用事で遅くなるそうです」

用事で行ったのは作り話である。

ブルマは、リンリンとトランクスを二人きりにするために出かけたのだ。

「夕食、私が作りましたから、食べてください」

「ああ、それじゃあ、いただきます」

初めての、トランクスとリンリンの二人だけの夕食だ。

しかし、リンリンには、どう会話をしているのか分からなかった。
そのため、食事中は無言であった。

そして、食事を終えたトランクスは、修行をしに出かけようとした。

「あ、あの・・トランクスさんに大事なお話が・・」

「なんだい？」

「・・私、貴方のことが、好きです！」

「・・・・！な、何を言っているんだい」

「冗談なんかじゃないんです。本気です！」

彼女が真剣だという事が、トランクスにも十分伝わった。

「あ、ありがとう・・嬉しいよ。でも、俺は戦うことしか知らない男・・君には、もっといい人が見つかるよ」

「そうですか・・でも自分の気持ちをトランクスさんに伝えたら、すつきりしました」

リンリンの目から涙が流れた・・

「・・リンリン、今の俺には答えが見つからない・・俺にもう少し時間をくれないか？」

「は、はい、いつまでも待ちます」

遠い存在だったトランクスが、少しだけ近くなった。

だが、時は待つてくれない。

三日後、彼女は倒れた。

彼女は幼き頃から、難病と闘っていたのだ。

そのことを、トランクスとブルマは、はじめて知った。

医者手遅れと二人に宣告した。

別の時代のリンリンは、18号のおかげで、ドラゴンボールで治ったが、この時代のリンリンは、あと少しの命なのだ。

2週間後・・・

彼女は危篤状態だった。

「（死ぬな、リンリン、俺の答えがやっと見つかったんだから）」
だが、彼女は儚い華のように散ってしまった。

トランクスは、静かに眠るリンリンの前で、

「・・・リンリン、俺の答えが見つかったよ・・・俺は君を愛している。
その気持ちはこれからも変わらない。今までありがとう・・・そして、
さようなら、俺が愛したリンリン」

と、別れの挨拶をした。

リンリンは、これからもトランクスの中で行き続ける事だろう。

二人は、本気で愛し合っていたのだから・・・

番外編 トランクス ラブストーリー（後編）（後書き）

ご愛読ありがとうございました^^
他の作品も含めて、
これからもヨロシクお願いします。
生時

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6882e/>

ドラゴンボール～クリリンと18号のラブストーリー～

2010年10月9日07時15分発行